

## 友人関係場面における感情経験と自律的な動機づけとの関連<sup>1,2)</sup>——友人関係イベントの分類

岡田 涼

名古屋大学大学院教育発達科学研究科

### 問題と目的

友人関係場面において、強い感情を喚起する出来事が後の行動を強く規定することがある。感情は人を対人行動に動機づける機能をもつとされており (Parrott, 2004), 友人関係での感情経験は動機づけと強い関連があると考えられる。

友人関係場面での動機づけを感情との関連から捉えた理論として、有機的統合理論 (Deci & Ryan, 1985) がある。ここでは、自律性の程度に沿って、外的調整、取り入りの調整、同一化的調整、内発的動機づけなどの動機づけを想定し、その定義において感情が果たす役割の重要性を認めている。例えば、自律性の程度の低い取り入りの調整では、不安や恥などの感情から友人関係に動機づけられる一方、もっとも自律的とされる内発的動機づけは、友人に対する興味や楽しさなどの感情から行動するものとされている。自律的な動機づけは、向社会的行動などの適応的な行動を促し (岡田, 2005), 友人関係の形成や維持に関わる要因である。

岡田 (2007) は、友人関係上の出来事 (以下、「友人関係イベント」) に際して経験される感情と、友人関係への動機づけとの関連を検討している。その結果、敵意などのネガティブな感情と自律的な動機づけとの間に負の関連がみられた。このことから、ネガティブな感情を喚起するイベントは、自律的な動機づけを抑制し、友人関係の形成や維持に負の影響をもつことが考えられる。

しかし、岡田 (2007) では友人関係イベントの内容については検討されていない。また、対人的なイベントと感情との関連を検討した研究でも、多くはポジティブ—ネガティブという基準のみからイベントが分類されており (e.g., Ne-

zlek, 2005; Stone, 1987), 内容の側面は検討されていない。友人関係イベントは多様であり、その内容によって影響力や経験される感情は異なる可能性がある。

以上を踏まえ、本研究では友人関係イベントの内容を分類したうえで、友人関係イベントが感情を介して動機づけに影響するモデルを検討する。

### 方 法

**対象者** 大学生および短大生 132 名 (男性 26 名, 女性 106 名)。平均年齢は 20.65 歳であった。

**質問紙** ①友人関係イベント 「過去3ヶ月の間で、友人関係に関する出来事の中でもっとも印象に残っているのはどんなことですか?」という指示によって、各対象者につき1つずつ友人関係イベントの自由記述を求めた。②感情経験 ①で記述した出来事に際して経験した感情を尋ねた。岡田 (2007) の結果から、「多面的感情状態尺度短縮版 (寺崎・古賀・岸本, 1991)」の抑うつ・不安、敵意、倦怠、活動的快、非活動的快、驚愕の6下位尺度より各3項目ずつを選定して使用した (“感じなかった” から “感じた” の4件法)。③動機づけ 「友人関係への動機づけ尺度 (岡田, 2005)」を用いた。この尺度は、友人と親しくしたり、一緒に時間を過ごす理由を尋ねるものであり、外的、取り入れ、同一化、内発の4下位尺度からなる (“あてはまらない” から “あてはまる” の5件法)。

**手続き** 2つの4年制大学と1つの短期大学で、講義時間中に回答を依頼し、一斉に実施した。

### 結 果

**イベントの分類** 友人関係イベントの自由記述について、指示にそぐわないもの5つを除いたうえで、KJ法に準じて分類を行った。その結果、Table 1 に示す10カテゴリーが得られた。

**尺度構成** 感情経験について、各3項目の加算平均を下位尺度得点とした ( $\alpha=.80\sim.91$ )。動機づけについても、各4項目の加算平均を下位尺度得点とした ( $\alpha=.74\sim.88$ )。なお、外的のみ  $\alpha$  係数が .46 と低かったため、以降の分析から省いた。

1) 本論文は、日本パーソナリティ心理学会第15回大会での発表を再構成したものである。

2) 本研究を行うにあたりご指導頂きました名古屋大学大学院教育発達科学研究科の速水敏彦先生に厚くお礼申し上げます。また、分析に際してご助力頂きました名古屋大学大学院教育発達科学研究科の松本麻友子さん、質問紙にご回答頂きました皆様に感謝致します。

**友人関係イベントと感情経験との関連** 各感情経験に対して、度数が5に満たないカテゴリーとその他を除き、友人関係イベントを独立変数とする分散分析を行った(Table 2)。その結果、驚愕を除くすべての感情経験に有意な差がみられた。抑うつ・不安に関しては、不和・関係の悪化で高く、次いで関係の親密化が高かった。敵意について

は、不和・関係の悪化で高く、倦怠は印象の変化で高い傾向がみられた。活動的快や非活動的快は、友人との再会や活動の共有などで高かった。

**感情経験と動機づけとの関連** 感情経験と動機づけとの相関係数を算出した。敵意は内発 ( $r=-.30, p<.01$ ) との間、倦怠は内発 ( $r=-.27, p<.01$ ) との間に負の相関、活動的快は同一化 ( $r=.28, p<.01$ )、内発 ( $r=.26, p<.01$ ) との間に正の相関があった。驚愕は取り入れ ( $r=.22, p<.05$ )、同一化 ( $r=.26, p<.01$ ) との間に正の相関があった。

**Table 1** 友人関係イベントのカテゴリーと記述例

イベントの例	
友人との再会 (36)	昔からの懐かしい友人に会った 昔の友だちが遊びに来た
関係の形成 (18)	今まで関わりのなかった人と仲よくなった 海外に新しい友人ができた
活動の共有 (20)	友人たちと旅行に出かけた 友人とご飯を食べて楽しい時間が過ごせた
関係の親密化 (18)	友人に自分の悩みを相談できた 友人と今までにないくらい深い話ができた
印象の変化 (10)	友だちに気をつかうようになった 友人のことがよくわからなくなってしまった
不和・関係の悪化 (7)	友人とけんかした 仲のよかった友人が冷たくなった
約束の不履行 (4)	ずっと前から約束していた日に断られた ドタキャンされた
友人のポジティブ・イベント (4)	友人に彼氏ができた 同年代の友人に赤ちゃんが生まれた
友人のネガティブ・イベント (3)	友人が事故に遭った 友人に彼氏ができたがすぐに別れた
その他 (7)	

注. 括弧内は度数を表す。

**考 察**

本研究では、友人関係イベントを分類し、その際の感情経験および動機づけとの関連について検討した。けんかなどによって特定の友人との関係が悪化した場合、敵意感情を経験することで、全般的な友人関係に対する内発的動機づけが低下してしまうことが考えられる。一方、気を遣うようになったなど、友人に対する印象が変化してしまう出来事があった場合、相手に対する倦怠感を生じ、後の内発的動機づけが抑制される可能性が示された。また、旧友と再会したり、友人と活動を共にすることで、快感情を経験し、同一化的調整や内発的動機づけが高まることも考えられる。抑うつや不安については、不和や関係の変化、あるいは親密化の過程において経験されるものの、後の動機づけにまでは影響しないと考えられる。

日常の友人関係イベントには多様なものが存在する。同じくポジティブ、ネガティブとされる出来事でも、経験される感情の種類や強度には違いがあり、後の動機づけにも異なる影響を及ぼす可能性がある。感情経験と動機づけとの関連について論じるうえでは、イベントの内容や経験される感情の質的な差異にも注目する必要があるだろう。

ここでは、友人関係イベントにおける感情経験が後の動機づけに影響するというプロセスを仮定して考察を行った。しかし、動機づけは比較的安定したものであり (Deci & Ryan, 1985)、感情経験という状態レベルの要因から影響を受けるか否かは慎重に検討すべき問題である。今後、縦断調査などによって変化過程を捉え、因果関係について検討する必要がある。また、本研究の対象者数は少なく、大部分は女性であったため、サンプル数を増やし、性差について

**Table 2** 友人関係イベントごとの感情経験の平均値 (SD)

	友人との再会 (n=36)	関係の形成 (n=18)	活動の共有 (n=20)	関係の親密化 (n=18)	印象の変化 (n=10)	不和・関係の 悪化 (n=7)	F 値
抑うつ・不安	1.40 (0.62) <sup>a</sup>	1.30 (0.43) <sup>a</sup>	1.38 (0.54) <sup>a</sup>	2.12 (0.84) <sup>b</sup>	2.43 (0.80) <sup>bc</sup>	3.10 (0.92) <sup>c</sup>	14.08*
敵意	1.11 (0.38) <sup>ab</sup>	1.22 (0.43) <sup>ab</sup>	1.07 (0.23) <sup>ab</sup>	1.00 (0.00) <sup>a</sup>	1.50 (0.50) <sup>bc</sup>	1.86 (0.92) <sup>c</sup>	6.54*
倦怠	1.22 (0.43) <sup>a</sup>	1.22 (0.38) <sup>a</sup>	1.17 (0.23) <sup>a</sup>	1.13 (0.20) <sup>a</sup>	1.80 (0.72) <sup>b</sup>	1.62 (0.78) <sup>ab</sup>	4.73*
活動的快	3.19 (0.69) <sup>a</sup>	3.04 (0.94) <sup>ab</sup>	3.22 (0.65) <sup>a</sup>	2.46 (0.91) <sup>bc</sup>	1.83 (0.89) <sup>cd</sup>	1.14 (0.34) <sup>d</sup>	13.58*
非活動的快	2.44 (0.83) <sup>a</sup>	1.81 (0.56) <sup>abc</sup>	2.35 (0.89) <sup>ab</sup>	1.80 (0.72) <sup>bc</sup>	1.40 (0.66) <sup>c</sup>	1.24 (0.42) <sup>c</sup>	6.36*
驚愕	2.22 (0.90) <sup>a</sup>	2.07 (0.79) <sup>a</sup>	1.77 (0.84) <sup>a</sup>	2.17 (0.79) <sup>a</sup>	2.63 (0.79) <sup>a</sup>	2.67 (1.31) <sup>a</sup>	1.93

注. 同じアルファベットをもつ平均値間には有意差がないことを示す。

\* $p<.001$

でも検討すべきである。

#### 引用文献

- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination*. New York: Plenum Press.
- Nezlek, J. B. (2005). Distinguishing affective and non-affective reactions to daily events. *Journal of Personality*, **73**, 1-30.
- 岡田 涼 (2005). 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討——自己決定理論の枠組みから—— *パーソナリティ研究*, **14**, 101-112.
- 岡田 涼 (2007). 日常における感情経験と自律的な動機づけとの関連——領域による差異の検討—— *日本グループダイナミクス学会第54回大会発表論文集*, 220-221.
- Parrott, W. G. (2004). The nature of emotion. In M. B. Brewer, & M. Hewstone (Eds.), *Emotion and motivation*. Oxford: Blackwell Publishing. pp. 5-20.
- Stone, A. A. (1987). Event content in a daily survey is differentially associated with concurrent mood. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 56-58.
- 寺崎正治・古賀愛人・岸本陽一 (1991). 多面的感情状態尺度・短縮版の作成 *日本心理学会第55回大会発表論文集*, 435.
- 2006.11.2 受稿, 2007.5.17 受理—

## Friendship Events, Affective Experience, and Motivation in Friendship

Ryo OKADA

Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2008, Vol. 16, No. 2, 247-249

The purpose of this study was to examine the relationship between affective experience and friendship motivation, at the same time categorizing friendship events. Participants were 132 university and junior college students. Ten categories of friendship events were found, and results showed that strain and deterioration of relationship predicted depression/anxiety and hostility, and change of impression led to boredom. Hostility and boredom in turn had a negative correlation with intrinsic motivation. The importance of diversity in friendship events in examining the relationship between affective experience and motivation was discussed.

**Key words:** friendship events, affective experience, friendship motivation, organismic integration theory, self-determination theory